

研究ノート：

＜フリー・ハグ＞の事例と記号要素管見

北 岡 一 道

(2017年3月10日受理)

キーワード key words

フリー・ハグ、示威行進、記号装置

1. はじめに

最近、主要メディアでは＜政治的パフォーマンス＞である＜デモ＞が頻繁に報道される。国際ニュース専門のテレビ番組では、ほぼ毎日にちかい、ようだ。その＜デモ＞に関連して、ときおり、＜フリー・ハグ（運動）＞が、とりあげられる。

去年末（2016年）大阪における＜フリー・ハグ＞が（主要メディアではごく一瞬）話題となった。毀誉はおくとして、ここでは、その件を事例として、＜フリー・ハグ＞とその記号要素について、管見してみよう。

2. ＜フリー・ハグ＞と＜画像＞

＜フリー・ハグ＞について、比較的しられた例は、＜黒人少年と白人警官の＜ハグ＞の＜画像＞＞であろう。写真では、12歳の黒人少年が涙をながしており、それを白人警官がだきしめている。

2014年4月8日に、アメリカ、ミズーリー州ファーガソンで、いわゆるファーガソン事件がおきる。コンビニからかえる黒人少年、マイケル・ブラウン（18）が警察官に職質をうけ、いいあいから、射殺された。このことは、国際的にも報じられ、各地で抗議のデモがつづいた。

おなじ2014年、11月25日、オレゴン州ポートランドでも、抗議デモがあった。そこに、12歳の黒人少年、デボンテ・ハート君が参加していた。デモ参加者の周囲には警官たちが警備にあたっていた。

少年は、首から＜フリー・ハグ、Free Hugs＞とある＜サイン＞をさげていた。かれが、ないている。白人警官であるブレット・バーナム氏が、たずねた。

「なぜ、ないてるのか？」

「さいきんは、お回りさんが、ほくたち黒人の子供にも、すごく怖くあたるので、おそろしいです。」。

そうこたえた少年に、バーナム氏はあやまり、＜ハグ＞した。少年の母親が、＜ハグ＞の瞬間を写真にとり、＜画像＞はやがて世界へと拡散していった。＜世界中でシェアされた「涙する黒人少年と白人警官のフリーハグ写真」＞といわれる。

＜フリー・ハグ(ズ)＞は、wikiなどでは、2001年にジェイソン・ハンター氏、個人の活動からはじまった、とされる。日本語＜フリー・ハグズ＞のいいかたも、おこなわれ、英語でのサイン、プラカードは＜Free Hugs＞と複数がふつうだ。以下では、よくおこなわれる日本語表現の＜フリー・ハグ＞をつかう。

この言葉と活動が世間的にしられるようになったのは、2006年にYouTubeに公開された＜Sick Puppies, All the Same＞という＜動画＞からだ。3分39秒のみじかい作品だ。その中身は、男性主人公の＜ホアン・マン＞氏が、＜フリー・ハグ＞とかいたプラカードをもって、＜ハグ＞をよびかけ、街路やショッピングモールをあるく。

セリフはなく、音楽が全体をとおしてながれている。はじめのうち（とうぜん？）、ホアンの＜フリー・ハグ＞におうじるひとは、ない。やが

て、＜ハグ＞をしてくれるひとびとがふえる。同時にあつめている署名もふえる。まわりで、おたがいに＜ハグ＞をしだすひとでもでくる。動画の表面的なながれは、それだけである。

ここでは、(すくなくも表面的には) ＜ハグ＞は政治・社会的なコンテクストにまきこまれてない。さきのデボンテ・ハート君のデモ中の＜フリー・ハグ＞(キャンペーン)とはちがう。デボンテ君自身に、コンテクストの理解があったかはべつに、デモ全体は、＜反・ファーガソン事件＞＝＜反・人種差別＞のながれにあった。

＜フリー・ハグ＞(という一種の運動、あるいはパフォーマンス)は、やがて世界各地でおこなわれるようになる。日本では、個人、小規模グループにより、おこなわれてきた。

2006年12月1日放送のテレビ番組で、＜フリー・ハグ＞をとりあげた。朝日放送「探偵ナイトスクープ」で、＜街で人は＜ハグ＞してくれるのか？＞という調査依頼が視聴者からあった。依頼者の青年が大阪の街中にたち、＜フリー・ハグ＞をくもとめた。収録された番組は大きな感動をよんだ、という。

この放送当時(2006年)は、＜フリー・ハグ＞が、日本でほとんど知られてなかった。が、10年たった今、(ふだん、その活動自体を目にするものではないが)常識的なことばになってきた、とおもわれる。

カナダのトロントで、＜社会実験＞として、イスラム教徒の男性が、路上で＜フリー・ハグ＞をもとめた＜動画＞がある(Social Experiment-Blindfolded Muslim Man on the Street, LiveLeak, 2015/2/8ほか)。男性は＜めかくし＞をして、＜自分はイスラム教徒だが、信じてくれるなら＞と、＜ハグ＞をもとめる旨のカードをおき、＜ハグ＞をまつ。はじめは敬遠されるが、＜ハグ＞をしてくれるひとびとが、あらわれる。

これは映像作家(で活動家の)AsoOmii Jay女史がつくられたもの。欧米圏でイスラム教徒がテロとの関連で排斥されがちな、状況での＜フリー・ハグ＞運動の例となった。＜イスラム教徒＞のかたが街頭で＜ハグ＞をもとめる＜動画＞作品がつづいた。

一見、＜主張性＞のある＜記録映像＞なのに、＜実験、experiment＞とは変だが、＜演技、やらせ＞でない＜事実＞だとおっしゃりたいのだろう。危害をくわえるひと(一応?)なく、協力的なひとがおおかったことが、＜意外＞であり、＜やらせ＞をうたがう向きへの＜ことわり＞ということだろう。

3. ＜フリー・ハグ＞事例の時系列要素

2016年末から、話題になった＜フリー・ハグ＞の例で、大阪でおこなわれたものが、ある。2016年11月21日にYouTubeにアップロードされた＜韓国人が反韓デモでフリー・ハグをしてみた＞という2分30秒の＜動画＞で紹介された。

Facebookへの投稿は、11月22日、桑原功一氏。Facebookの日本ランキングで4位になった。朝鮮日報、RecordChinaなども記事にあついている。

桑原巧一氏は、ご自身のHPほか、各所で紹介される。Huffington Post(2016年12月30日JST投稿)によると、神奈川県箱根のホテルではたらきながら、＜フリー・ハグ＞の活動を5年つづけておられる。

2008年大学生のころ、フィリピン、バギオで英語の短期留学をした。生徒400人のうち12人が日本人で、のこりほとんどが、韓国人。反日の態度を予想したが、ひとなつこく、積極的に仲良くしてくれ、韓国人にたいするイメージがかわった。

その後、＜海外に行く前の自分の価値観を崩す＞ための試行錯誤のすえ、＜フリー・ハグ＞にであった。ご自分が登場される＜フリー・ハグ＞動画を制作してこられた。

大阪＜フリー・ハグ＞の映像では、韓服をきたわかい女性が＜ハグ＞をもとめる。このかたは、韓国、大邱で日本語をまなぶ女子大生のユン・スヨン(20)さん。たんに、＜演技者＞としての出演だけでなく、ご本人も、意図的に＜フリー・ハグ＞の活動をしてこられた。

スヨンさんは、ヘイトデモの行進を背景に、アイマスクをして、大阪の戎橋(えびすばし)にたった。状況的に危険も予想され、4人のボディ

ガードをつけ、撮影は（2分半の動画にたいし）4時間をつかった、とのこと。

作品は、政治的あるいは、文学的な主張があるはずで、視聴者のひとたちにも、毀誉さまざまな評価があるようだ。（在日のかたでさえ、趣旨はともかく、いま、一部のひとたちを刺激するのは、よくないという意見もあるらしい。）が、ここでは、ただ動画の構成について、時系列に連鎖する要素を指摘していく。

さて、全体的な印象につながるストーリー的な構成だが：（流布された動画によって細部がことなるようだが、以下はYouTubeのもの。）

- 1>タイトルページに、<韓国人が反韓デモでフリー・ハグしてみた>とあり、韓服をきた女性のうつつ。
- 2>橋の欄干を背にした女性が<フリー・ハグ>のプラカードを脇におき、<アイマスク>をする。
- 3>別の街路で、日章旗、旭日旗をもった集団があるいている。見物人のなかで、赤ちゃんをだいたお母さんがうつされる。
- 4>場所が韓服の女性にもどり、<ハグ>をまつ女性の肩越しに、さきほどのデモ隊がとおりすぎる。
- 5>黒地に白文字のページで、韓日両語で<それでも、あなたを、信じます>とでる。
- 6>次々に、<ハグ>をしてくれるひとがあらわれる。
- 7>文字ページ、<桑原巧一>氏のなまえ、つぎに、関係者の<クレジット>。

全体に音声のセリフはなく、一貫して、1つの音楽がながれている。この点、手法は、うへの<Social Experiment-Blindfolded Muslim Man on the Street>と、にている。

さて、細部について若干みると、タイトルページは、<韓国人が反韓デモでフリー・ハグしてみた>と日本語だけであり、<動画>が、基本的に日本人むけのものである、としてつくられている。

タイトルと同時に、<韓服>を着て、<アイマスク>をしている。この<チマチョゴリ>で、<韓国人>の<女性>ということが、すぐわかる。演技、演出であっても、その解釈がふつうだろう。

<アイマスク>は一般のひとには、なぞめいて、すぐには意味が理解しがたい。時事にくわしいひとは、<Social Experiment>などの事例を連想するだろうが。

女性のしようすることは、おかれた<プラカード>によって、はっきりする。カードには日本語で、<私は韓国人です。今日、隣の通りでは、ヘイトデモが行われています。でも、私はあなたを信じます。一緒にハグしませんか。>とある。

この日本語の<字幕（訳語）>が韓国語で、画面右横にはいる。タイトルページは、作品が日本人むけであることを暗示していたが、（編集されて？）同時に韓国人にもむけられていることが、わかる。カードと字幕の字はおもに、黒だが、日韓両語で<韓国人>と<ハグ>がともにミドリ色、<ヘイトデモ>が赤でかかれている。

つぎに、<スヨン>と女のかたの名前、ついで、<大阪>と地名がキャプション（字幕とおなじだしかた）でうつる。日本人には、<スヨン>がお名前であることは、動画のながれで一瞬にはわかりづらい。

はじめから<15秒後>、ほぼ1人でうつっていた女性から、カメラがひいて、まわりの通行人がうつる。<ハグ>におうじるひとは、ない。

<23秒後>、デモのひとびとが、おおくの日章旗、旭日旗をかかげてあらわれる。先頭のひとたちが、<日韓断交>の横断幕をかかげていて、デモの趣旨がわかる。（韓国人視聴者には、漢字はよみづらいだろう。）

<30-35秒後>、デモの見物人（らしいひと）のなかに、赤ちゃんをだいた、お母さんがうつる。とおくから、カメラがよる。お母さんの顔がむこう、赤ちゃんの顔が正面（こちらがわ）をむく。

画面右下にうつり、この場面のため2分あまり（クレジット直前まで、内容本編は2分15秒）の作品のうち5秒とっている。スヨンさんに、<ハグ>はおとずれてないが、すでにこのシーンに、<ハグ>がある。

<42秒後>、<アイマスク>をしたスヨンさんは橋（戎橋）の欄干を背にたち、その背中ごし、

むこうの橋をデモ隊がゆっくり通過する。ここが、タイトル＜韓国人が反韓デモでフリー・ハグをしてみた＞における＜反韓デモ＞との＜対峙＞にあたると、論者にはかんじられ、緊張感がある。

本編なかば＜1分00秒後＞、黒地に白い文字列がはいる。いわく、韓日両語で＜それでも＞、＜あなたを＞、＜信じます＞と3ページにわけて＜5秒＞をつかう。ゆっくりと、時間を取り、女性の＜気持ち＞をあらわす。

＜1分5秒後＞、スヨンさんのたつ橋の上、＜1分7秒＞、はじめてのひとが、ちかづき、スヨンさんを＜ハグ＞する。カメラはよこから。わかい女性だった。まわりのひとは、ながめ、あるいは、スマホをかざす。

＜1分13秒後＞、2人めのひとが、ちかづき＜ハグ＞をする。カメラはうしろから、スヨンさんは背、人物は男性で、おだやかな表情。

＜1分22秒後＞、4人めの人物が＜ハグ＞。カメラはうしろから、そのちいさな子の顔はみえない。スヨンさんは、正面で＜アイマスク＞をするも、笑顔。複数の紹介記事では、＜ちいさな女の子＞。

＜1分28秒後＞、6人めのひとが＜ハグ＞。カメラはほぼ、正面だが、人垣のあいだから、その女性がちいさくうつる。2人の表情はとらえにくい。

＜1分33秒後＞、8人め、年配の男性が＜ハグ＞。カメラは、まえから、スヨンさんの笑顔。

＜1分37秒後＞、9-10人め。双子のような女の子たち。カメラはうしろから、女の子たちのあかるい笑顔。

＜1分49秒後＞、14人めは、カメラはよこから、女性が＜ハグ＞。

このシーンには、不思議なことがあり、1人め（1分13秒後）と同一人物（らしきひと）が2人たっている。カメラの位置、したがって（＜同一人物＞の2人、スヨンさん、＜ハグ＞をした人の）人物配置も、おなじである。

この＜1分49秒後＞シーンと＜1分13秒後＞シーンは、ほぼ同一時点で、撮影されたようにみえる。全体的なシーン構成も、＜順どり＞でなく、効果的に編集されたものであろう。

＜1分55秒後＞、最後の＜ハグ＞シーンで合計、16人。カメラは正面、男のかた。

そして、＜2分00秒後＞、黒い画面で、＜「憎しみからは平和は生まれません…」＞、＜「Produced by 桑原巧…」＞、＜「Free Hugger… Suyeon Youn」＞、＜クレジットロール＞とつづく。

しかし、全編、音楽はながれるが、音声となった＜ことば＞はきかれない。

＜「憎しみからは平和は生まれません…」＞の部分は、ながれでみるとスヨンさんの思い、と自然にとれる。が、つづく、＜桑原＞、＜クレジット＞の名前がつづく、このひとたちの主張でもある。

ここで、＜2分15秒＞がすぎ、あと関連作品の紹介となり、＜2分30秒＞で終了。作品は実質、＜2分15秒＞とみてよいだろう。

4. ＜フリー・ハグ＞事例の選択的要素

時系列であらわれる記号群は、また、（かならずしも）時系列でない要素の選択（あるいは対立）のなかで、記号要素の地位がきまる、とされる。

たとえば、この作品で視聴者に、＜女性＞が＜韓国である＞ことを、つたえるのに、

1＞言語的につたえるか：プラカードのことば＜私は韓国人です＞。

2＞非言語的につたえるか：女性がきている＜韓服＞。

を利用している。それ以前に、現場の通行人に、そうつたえている。

この作品では、ほかに、タイトルページで＜韓国が…＞とあり、女性が韓国人であることが、つたえられて（暗示？）いる。キャプション（字幕）のかたち（たとえば＜韓国人、スヨンさん＞などと）は利用されてない。名前＜…スヨン＞は、微妙だろう。

これらは、＜韓国人であること＞をつたえる記号要素（道具）群のなかから、選択され、その画面（記号連鎖）のなかに、おかれている。そのひとから、はるかに、はなれたところに、プラカードがあれば、また、韓服があれば、＜そのひと

は、韓国人だ>という信号にならない。(とうぜん、フィクションで、あるいは、詐欺で、その記号が近接的につかわれることは、あるだろう。)

コミュニケーションの大枠要素で、記号・信号の<送りて>、<受けて>などということがある。この作品で、<送りて>とは、一見スヨンさんであるように見える。<フリー・ハグ>という記号装置を起動させ、最後で、まとめのコメントページにつづき、<Free Hugger…Suyeon Youn>とその名がある。

戎橋(えびすばし)のうえでは、<送りて>はたしかに、この女性であった。しかし、名について、製作者の桑原巧一氏の名があり、さらに(1ページ静止で)<クレジットロール>に多数の名前がならぶ。

<動画>作家である、桑原氏は、動画レベルでは、あきらかに<送りて>である。終末の構成は、クレジットのみなさんも<送りて>であることを、暗示するかたちになっているようだ。

こうした<動画>は、さらにコピーやリンクによって、他の<送りて>によって、そのメッセージの一部とされやすい。<送りて>は、不定に増殖していく。それは、デジタル環境では<送りて>がとうぜんのことと予期していることでもある。

うえは、全体的な<送りて>であるが、繁華な街中にロケをした<動画>作品なので、さまざまなコミュニケーションの断片が、したがって<送りて>の断片が、あらわれる。

たとえば、スヨンさんと、通行人とのあいだに、言語・非言語のコミュニケーションがある。<ハグ>しおえた男性が、かるく会釈をする。彼女は、<アイマスク>をしているが、気配でそれと気づき、会釈をかえす。両者は瞬間、絶妙に<会釈>というコミュニケーションの<送りて>、<受けて>となる。

デモ隊は、<日韓断交>の横断幕をもっている。画面にたいして文字は十分おおきく、日本人には、これも言語的メッセージとして、理解されるだろう。<送りて>はまずデモ隊であり、それを<よめる>かたちで<画像>にした製作者も、そうだ。

デモ隊があるいていくとき、頭上に、地名の<

サイン>があり、よくみると、<御堂筋 八幡町…>とある。ひとびとや町並みが、ひかえめにとられたシーンなので、<サイン>自体はめだつ。

PC画面で文字が判読できるていど、おおくの視聴者はスマホのちいさな画面でみるだろう。視聴者がこの文字を判読、解釈することは、制作側は期待してないかと、おもう。サインの設置者は、お役所で<送りて>ともいえ、<動画>製作者も、一応、二次的な<送りて>として、その大きさを選択して<画像>にいている。

ここでの<送りて>の意図は<地名のサインがあります>ていどだろう。<御堂筋 八幡町>は、関西、大阪にくわしいかたなら、わかるが。

はじめて、この<動画>作品をみたひとは、(とくに制作過程について、情報をもたないばあい)これは、<ドラマ>(フィクションである映像)か、<再現ドラマ>(ストーリー骨子は事実であるが、演技が収録された映像)か、<記録映像>(映像自体がほぼ事実)か、の区別がつかない。

これが、<記録映像>であると解釈されるのは、基本的に、ニュースや、解説記事など、外部的な情報だろう。<動画>作品自体の、提示のありかた(テキストチャーのようなこと)に依存するところもある。

<動画>の本編の内容での、おおきな道具立てについては、<大道芸>や<実演販売>などとあまりかわらない。本編では、<韓服>をきた<女性>が、<プラカード>をよこに、<アイマスク>をして、<街頭=通行人のなか>にたっている。(論者は、おなじ2016年たまたま、大阪の街頭で、<アイマスク>をしておこなわれる、大道芸に遭遇した。)

これらでは共通して、<演者>が<街頭>で、一定の<パーフォーマンス、演技?>をおこなっている。ただ、<フリー・ハグ>は<芸>ではなく、<ビジネス>ではない。(部分的には、重複するかもしれないが。) <感動を付与>するのでなく<感動を共有>しようとし、<お金を獲得>するのでなく<ひとを獲得>しようとし、しているようにみえる。

5. むすび

うえて、〈フリー・ハグ〉の事例として、〈韓国人が反韓デモでフリー・ハグをしてみた〉という〈動画〉作品を中心にみてきた。

〈フリー・ハグ〉の特徴的な性格について、第一に、現状、〈フリー・ハグ〉は、〈政治的パフォーマンス〉である〈デモ行動〉などと、にている（あるいは、その一部として、実施される）。が、〈街頭の行動〉以上に〈デジタル環境の記録映像〉としての意味がおおきい。

第二に、街頭の〈行動〉においては、〈送りて〉は基本的に行動者本人らだが、〈映像〉において〈送りて〉は、行動者と製作者となる。デジタル環境が前提となるので、〈送りて〉は拡大しうる。

第三に、動画としてみたばあい、非常に〈単純〉で（音声言語、こみいったプロットなどもない）、〈みじかい〉（事例作品は実質2分15秒）。〈反ヘイト〉、〈共生〉といった骨格的なメッ

セージにしほりこみ、〈動画〉がくりかえし再生されることを前提につくられているようだ。

〈フリー・ハグ〉は〈身体〉、〈街頭〉、〈デジタル環境〉をむすびつけ、あたらしい記号装置として機能しつつある。

6. 〈参考文献〉

高橋俊平.『黒人の公民権運動について』.道都大学（卒業論文）.2007.

7. 〈付記〉

デジタル環境の変遷について、ご示唆いただいた仁愛女子短期大学、大西新吾先生；街頭におけるコミュニケーションについて解説いただいた〈ジャグリングパフォーマー〉、ジャグリングRen氏にお礼もうしあげます。